

保育現場における応用行動分析を活用した 効果的な介入についての考察

花 本 美 代*

Consideration of Effective Interventions Using Applied Behavior Analysis in Childcare Settings

Miyo HANAMOTO

Key words : 応用行動分析 applied behavior analysis, 保育現場 childcare site, 気になる子ども child who care,
療育センター rehabilitation center

I. 問題と目的

令和5年度版障害者白書によると、令和4年5月1日現在、特別支援学校（小学部・中学部）及び小・中学校の特別支援学級在籍者並びに、小・中学校の通級による指導を受けている児童生徒の総数は約62万人となっており、増加傾向にあることが示されている。また、文部科学省において、「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」が令和4年1月から2月に実施され、その結果が令和4年12月に公表された。同様の調査は、過去2回実施されているが、知的に遅れはないものの、学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合は、それぞれ6.3%, 6.5%であったが、今回の調査では8.8%という結果が示されている。これら調査における対象は、就学した児童であるが、結果に示される「行動面での著しい困難」については、その全てが就学後に生じるものではなく、その特性は乳幼児期から継続した課題であることから、就学以前の子どもにおける行動面での著しい困難さの割合にも影響していると考えられる。

保育の現場においても「気になる」子どもを巡る問題に関しては、保育者にとって大きな課題となっている。岩国市療育センターにて実施している、保育士、幼稚園教諭を対象とした勉強会においても保育現場において「気になる」子どもという表現での現場からの困り感は多く寄せられている。

では、この「気になる」子どもであるが、本郷ら¹⁾によると、「顕著な知的な遅れがなく、専門機関において何らかの障害を持つとは判定されていないものの、障害特性

的な行動特徴をもち、保育者にとって保育が難しいと考えられている子どものこととする」と定義されている。また、池田ら²⁾によると、保護者からの虐待などの不適切な養育など、家庭環境や経済面の課題により、情緒や行動発達に影響を受けた子どもを示すと明記されている。

この「気になる」子どもの保育現場での対応は、必要性和専門性が求められているが、実際は子どもの問題行動に振り回され、対応に苦慮し、集団生活の中で子どもの特性を理解し適切な行動へと導く為の支援には至らず、個に発達や特性に応じることの難しさが声として挙がっている。和田³⁾によると、保育者は障害の概念的な知識はあっても、その具体的な対応が分からなければ困難さは解消しないことを指摘している。特性をよく理解した具体的な対応方法の知識の取得機会の必要性についても指摘している。更に、神長ら⁴⁾は、「気になる」子どもを担当する保育者は、その対応やクラスのまとまりのなさを自らの保育実践力の低さとして得捉え、自信喪失となるケースがあることを指摘している。今村ら⁵⁾によると、保育者は、専門機関との情報交換の場や、連携が欲しいと感じていることを指摘している。

そこで本稿では、保育園における「気になる」子どもも含めた、園で対応が難しいと考えられている子どもの対応について、保育士を対象とした研修を実施した。事前に、現場の保育士が実際の保育でどのような行動に困っているのかを自由記述にて回答してもらい、把握した困り感に沿ったプログラムを計画し、実際保育現場で見られる問題行動をアセスメントし具体的な対応について、研修の中で扱った。研修終了後の保育士からの感想を基に、研修の効果について考察を行った。

* 広島文化学園大学学芸学部こども学科（非常勤講師）

Ⅱ．方 法

1) 対象

A市療育センターを利用する発達障害（注意欠如多動症・自閉スペクトラム症・学習障害）等の医学的な診断を受けている、または保護者より何らかの困り感を主訴として当センターを受診している子どもたちのほとんどが在籍する、A市内の保育所保育士。令和元年の保育士対象研修会では、19施設から29人が参加。

2) 保育士対象研修会の時期・場所・講師

平成28年度から保育士対象とした研修会をA市療育センター内の療育室にて年1回6月に実施している。参加保育士より、事前に自由記述の質問紙にて、「現在の保育で困っていること」「取り上げて欲しい内容」を回答してもらい、その保育士のニーズを基に構成されたプログラムで研修会を編成した。プログラムの中で「現在の保育で困っていること」に関しては、そのこどもの行動をアセスメントし、解決方法となる具体的な支援についての助言を行い、返答する形とした。研修終了時に参加保育士へのアンケート調査を実施し、研修を受けての感想と、今後同様の研修があった場合参加を希望するかについての満足度について回答を得た。研修の講師は、A市療育センターの特別支援教育士の資格を持った心理療法士、音楽療法士。

表1 令和元年度 保育士研修会プログラム

- | |
|------------------------|
| ① 発達障害の特性理解～就学を見据えた支援～ |
| ② 発達障害の特性理解～具体的対応について～ |
| ③ 質疑応答・アンケートの実施 |

3) 調査内容

保育士研修実施の約1ヶ月前に、参加を希望する保育所へ質問紙を送付。実際の保育現場での困り感や解決しない課題となっている「現在の保育で困っていること」、研修の中で「取り上げて欲しい内容」を自由記述の質問紙によるアンケートで回答を求めた。

本稿では令和元年度に実施した保育士対象研修会のアンケートの回答を対象とした。

保育士から挙げられた「現在の保育で困っていること」については、大対⁶⁾による「問題行動のコードと定義」を用いて、分類した。

Ⅲ．結 果

A市療育センターにて実施されている、保育士対象研修会では、①療育センターでの療育を知ってもらうこと、②療育センターを利用する子どもに対して、地域の保育所との連携を図り一貫性のある支援を行うことを目的とし立ち上げられた。しかし、実際の保育の現場では、療育センターを利用する子ども以外にも「気になる」子どもの対応に苦慮し、療育センターに繋がらない為に日々保育士が悩みながら保育をしている現状が、平成28年度より開催したこの保育士対象研修会から見えてきた。そこで、研修の内容については、療育センターが必要であると思う内容で研修をおこなうのではなく、現場保育士のニーズに沿った内容を扱うこととした。

研修会参加予定の保育士から、自由記述による事前アンケートにて、「現在の保育で困っていること」を回収し、問題行動とされているこどもの行動について機能的アセスメントを行い、人的な関わりを含む環境調整や刺激の統制、代替行動の獲得のマネジメントを行う支援の提案を行う必要があると考えた。子どもの問題行動に関してはこの機能的アセスメントによる行動論的アプローチが、医療や療育の現場のみならず、保育所や幼稚園、小学校などの教育現場においても有効な支援の方法であることが報告されている。

機能的アセスメントとは、問題行動の機能すなわちその行動が対象者にとってどのような目的を果たしているのかという観点と行動の頻度が増加する要因となる環境や刺激をどう適するため用いられる評価手続きのことを示している（DuPaul & Ervin, 1996）。この機能的アセスメントを行うための手続きとして用いられるのが、ABC分析である。ABC分析とは、問題行動（B: Behavior）のきっかけとなった刺激や状況（A: Antecedent）、その行動の結果（C: Consequence）というこのABCで行動

表2 問題行動のコードと定義 大対（2016）

コード	定 義
逸脱	集団活動とは違う活動に従事している。すべきことが出来ていない状態。
不適切	やるべき課題に取り組んでいるが、その手段・態度が適切でない。脱規範的な行動。
不注意	課題の実施中に集中していない。ぼーっとしている。
攻撃	相手を殴る・叩く・突き飛ばす・暴言を吐く・悪口・文句・物を投げる。
離席	いるべき場所から離れる。
不服従	言われたことに対し、「いや」「したくない」などの拒絶や、無視し続ける、または従わない。
情動的反応	泣く・キレる・拗ねる・わめく・ごねるなどの情動に基づく反応。
該当なし	上記に該当無し。

を記述し分析することである。このABCの関係性を応用行動分析学では三項随伴性 (Skinner, 1953) という。

以上の理論を用いて、保育士から挙げられた「現在の保育で困っていること」に対して、機能的アセスメントを行い、応用行動分析を活用し、より効果的な支援について学ぶ研修を実施した。

研修参加保育士から挙げられた、「現在の保育で困っていること【逸脱】【不適切】」では、行動を引き起こしているきっかけである状況は大まかに捉えられているが、理由までは把握できていない様子が伺えた。保育士から丁寧に状況を聞き出すことで、その状況の何が子どもにとって苦痛であるのかは把握を促した。問題行動とされる子どもの行動は、常に起っているのではないこと、個々の子どもにとって理由は各々異なるが、行事への参加に対する抵抗感については、幾つかの理由に絞られる為、事前の対応によって、適切な行動へ促すことは可能であることを講義の中で伝えることができた。

次に、「現在の保育で困っていること【不注意】」についてだが、今回の事前アンケートにはそれに該当するエピソードは挙げてこなかった。この「不注意」についてであるが、就学後の子どもを支援する小学校教諭からは、よく挙がるこどもの問題行動である。「不注意」が問題行動となる場面については、読み書き計算を習得する際に確認される事が多い。文字や漢字の書き誤りや、計算のケアレスミス、本読みの勝手読み、指示の聞き誤りによる活動の失敗が行動として表れやすいからである。就学前の保育園ではそれらの活動は設定されていない為、困り感としては現れにくいことが予測される。また、発達に課題のある子どもに対しては、個別に加配教員を配置していることが多いことから、この不注意に関する課題が問題行動と捉えられる程の問題には至っていないことが予測される。この加配教員についてであるが、厚生労働省保育関係課(8) 障害児保育の推進によると、障害のある子どもの保育については、概ね障害児2名に対し、保育士1名を水準としつつ、適切に保育士を配置し障害児保育を推進するよう記述しており、各市町村によってその運営が行われているものである。

次に、「現在の保育で困っていること【攻撃】」については、「衝動的にすぐ手が出てしまう」との記述があったが、保育士から具体的に場面を聞き出すと、戸外遊びでルールのある遊びの集団に参加している際、自分の思うように友だちが動いてくれなかった時にのみ起る行動であることが明らかになった。このように、対人トラブルが頻繁に続くと、手が出てしまう子どもは「常に」それを行い、「すぐに」手が出てしまう子どもとして捉えられがちである。自由遊びが毎日設定されている保育現場では、無論トラブルは頻繁には起るものの、その問題行動は常に起るわけではなく、場面がかなり限られていることが明確となった。兎角、問題行動を起こす子どもは、

表3 研修前のアンケートより

現在の保育で困っていること【逸脱】
<ul style="list-style-type: none"> ・運動会の全体練習になると嫌がり、行進すら手を引いても動かなかったり、じっと立つことが出来ず、座ったり歩き回ったりする。 ・はじめは参加するが、時間が経つと飽きて違うことに気が逸れ参加しなくなる。 ・室内を走り回る。
現在の保育で困っていること【不適切】
<ul style="list-style-type: none"> ・行事の参加中、テンションが上がって奇声をあげ、寝転がる。 ・集団の輪に入ったり並んだり出来るが、何もせずじっと座り砂弄りをしている。 ・朝の準備、給食の準備、片づけの時間に、笑い始めると止まらない。 ・本児の時間の流れで行動しようとする。
現在の保育で困っていること【不注意】
*該当無し
現在の保育で困っていること【攻撃】
<ul style="list-style-type: none"> ・衝動的にすぐ手が出てしまい、理由も言えず同じ事を繰り返す。
現在の保育で困っていること【離席】
<ul style="list-style-type: none"> ・給食の時に、こちらの様子を見ながら箸を投げて、椅子から立ち上がろうとする。 ・保育室から出てしまう。
現在の保育で困っていること【不服従】
<ul style="list-style-type: none"> ・教室で走り出し「歩こうか」というと「走ります」と言っ て走る。 ・皆が座っている時に立ち「誰がおかしい?」とうれしそうに笑いながらわざと違うことをして聞いてくることが度々ある。子どもの性格からこのような行動をしているのか、あるいは発達障害であるのか悩む。 ・片付けの時間になっても片付けず、声掛けをしても遊び続ける。 ・必ず「いや」と言って行動を共にしない。
現在の保育で困っていること【情動的反応】
<ul style="list-style-type: none"> ・嫌なことや、自分が間違えると、突然パニックを起こし部屋から飛び出す。 ・行事の環境の変化で泣き出し、全く参加できない。 ・集団行動を取らせようとすると、泣いて暴れる。 ・ルールのある遊びで勝ち負けに拘りすぎる。負けると泣き喚き、ひと暴れする。 ・園の行事の度に興奮し、騒ぐ。保育士が抱いて動きを止めるとパニックになる。 ・全体で制作すると手が汚れることを嫌がり、パニックになる。 ・気持ちの切り替えが難しい。
現在の保育で困っていること【該当無し】
<ul style="list-style-type: none"> ・参観日に参加できない。 ・昼寝が出来ず、眠くても寝られない。 ・偏食がある。 ・気になる子、発達障害と診断の出ない子への対応に困る。 ・発達障害と診断されていない場合、どう理解すればいいのかわからない。 ・わがママを言う。どこまで許してあげるべきなのかわからない。

その行動でマイナスな評価をされることが多く、そうすると問題行動の本質を見抜けず適切な支援に繋がりにくいことがある。このケースでは、対人関係における適切な対応を子どもが習得できるようサポートすること、また、

上手く言葉にならない要因を特定し支援に繋げる事が必要であることを研修で扱うことができた。

次に、「保育で困っていること【離席】」「保育で困っている子と【不服従】」についてであるが、保育士の注目を獲得する行動と、子どもの中でのルールが集団の中で許されている為に適切な行動を取ることで自分が獲得できていない行動とに分け、分析を行った。保育士の注目を獲得する行動に対する支援については、保育士から不適切な行動に対しては、「反応しないようにしている」といった対応が多く挙げられた。行動を強化しないことを目的に反応しない対応は適切ではあるのだが、問題行動を消去するだけに留まるため、適切な行動を獲得するといった根本的な解決には至らないことを講義の中で伝えた。また、問題行動を起こす子ども中での自分ルールが集団の中で、ある程度許されているケースについては、自分ルールが「許される場面がある」「許されない場面もある」など保育士の対応が一貫していないによって、問題行動を獲得し、その行動を強化していることについても講義の中で伝えた。子どもの中には、自分のルールを決めてしまうとそれを変更することが苦手な子どもがいることについては、発達障害の特性理解として学ぶ機会にもなった。

次に、「保育で困っていること【情動的反応】」「保育で困っていること【該当無し】」についても同様に、発達障害の特性理解として、失敗や間違え事への過度なストレスや不安を抱きやすい特性があること、環境の変化や経験したことがない事への受け入れが難しい特性があること、見通しが立たない活動は不安が強く、パニックになることがあること、勝ち負けへのこだわりが過剰に強い面があること、気持ちの切り替えの難しさがあることを講義の中で伝え、特性を理解することで事前にできる支援について学ぶ機会を持つことができた。「保育で困っていること【該当無し】」の中で、発達障害の診断についての触れられていた為、診断が必ずしも支援を行う上で必要では無く、大切なのは診断として理解するのでなく、その子どもの特性を理解し、生じている問題行動をどのように捉え分析し、環境を調節し対応を考えるかであることを伝えることができた。

研修後のアンケートからは、これまでは子どもの問題行動に対してアプローチし、子どもの行動を変えようとする対応を取っていたが、問題とされる行動に対し、機能的アセスメントを行い、応用行動分析を活用し、より効果的な支援を考えていくことの重要性が感じられている感想が多く見られた。本取り組みを通して、発達心理学的アプローチを加味することの有効性を再認識できた。

また、各園の保育士からの「現在の保育で困っていること」はどの園でもあり得ることで、皆同じように悩んで対応しているといった思いを共有する場になっている感想もあり、分かち合いの場が得られたことで、保育士

表4 研修終了後アンケートより

今後教室で取り上げて欲しい内容
<ul style="list-style-type: none"> ・子どもは接し方で変わると思った。 ・気になる子どもについて、今現在の保育に困難なことが多くあり、今子どもたちが困っていることをどのように改善したらいいのかを主に考えていたが、先を見据えての支援、関わりが大切だということ学んだ。 ・具体的に教えていただきとても分かりやすかった。こうゆう勉強会に参加して保育するとまた今までとは違った見方で保育できると思った。 ・しっかり子どもを見る、観察することが大切ということの再確認ができてよかった。 ・様々な施設の悩みが出されていたが、どれも自分が感じたことのあるもの、または現在感じているものばかりだったことから、自分だけではないと感じた。 ・子どもを観察すること、前準備をしっかりすることの大切さを学んだ。 ・自分の対応や関わりを一度見直そうと思った。その時の行動だけでなく原因を考え防げるようにしていきたい。その子に合った支援方法を保護者と話をし、共通理解を行い、対応していく必要があると感じた。否定語を多く使ってしまったので肯定的な言葉かけを意識していきたい。 ・日頃の保育の中で「○○しません」「それはダメだよ」など否定語を使い、声掛けのみ解決しようとしていたので、その子供に合った対応法を探していこうと思った。またそのためにABCで具体的に書きだして対応を考えようと思う。 ・具体的な対応を知ることができてよかった。すぐに活かせることができると感じた。「×の提示をしない」というのは目から鱗だった。対処だけでなく予防も大事だと思った。 ・発達障害の子と思わずその子が何に困っているのか、その子にとって何が必要なのかを見つけながら生活することが大切で、普通の子にもしっかり使っていけると思った。 ・子どもの行動のみで判断するのではなく、その前後もよく観察することが大切だと改めて気づくことができた。 ・ダメではなく、その子の行動を考えていきABCで書いてみようと思った。 ・行動を考えてメモする、記入して見る方法を取り入れていきたいと思った。行動の理由を知り、その子に合った援助をしていけたらと思った。 ・困っている行動の分析、理解が大切であることがわかった。ご褒美のあげ方、あたえ方を間違えると行動がさらに激しくなることが改めて考えることができた。 ・ABC分析は別の研修でも聞いたことがあり、当てはめることでその子の対応の仕方が見つかる方法だと改めて感じた。 ・パニックや癇癪を起こす際には、必ず要因があり、日頃から「いつ」「どんな時に」をしっかりチェックし、未然に防げるように配慮していきたいと思った。 ・具体的に例をあげてくださり、その対応への仕方を学ぶことができたのでよかった。 ・とても分かりやすかった。

が孤立せず現場で抱く不安や悩みを共有する場の必要性については、改めて感じることとなった。

研修終了後に実施した、研修に対しての満足度に関するアンケートでは、開催を希望する保育士の声が多く挙がっている。自由記述の感想では、「このような機会をたくさん設けて欲しい」「子どもへの対応をもっと知りたい」「支援の在り方についての研修は今後も行って欲しい」という意見が挙げられており、このような具体的な対応を学ぶ研修が、保育士の学ぶ意欲を高めるきっかけとなっていると感じることができた。

表5 プログラムの内容に対する満足度

今後も開催を希望する	20 (69.0%)
希望しない	0 (0.0%)
どちらでもない	1 (3.4%)
回答無し	8 (27.6%)

IV. 考 察

A市療育センターにて実施されている、保育士対象研修会では、①療育センターでの療育を知ってもらうこと、②地域の保育所との連携を図り一貫性のある支援を行うことを目的としたが、実際の保育現場からは、「気になる」子どもの対応を含め、発達障害の特性が見られる子どもへの対応の難しさを感じており、自らの対応に迷い、悩みながら支援をしていることが事前アンケートより明らかとなった。その為、その困り感を解消する為には、実際に抱えている問題を取り上げ、具体的な対応方法を習得する研修が必要であると感じている。発達障害についての研修は数多く存在するが、地域の療育センターが地域の保育園の保育士の困り感に寄り添った研修を行う意義は大きいと感じている。困り感に寄り添いながら、個々の子どもの発達特性を把握し、教育心理学がもたらす知見を生かしつつ、適切な支援について共に考える場を持つことこそが、目的の秘湯である「地域の保育園と一貫した支援」を行えると考えられる。

V. 終 わ り に

A市療育センターは、これまで市内に療育センターが無かったことから、平成24年7月に、それまでA市の病院内で行っていた発達外来を、療育センターの機能として移行し開設し、地域の子どもにより専門的な療育を提供出来る場として立ち上げられた。療育センターの意義や役割は、子どもたちへの直接的な介入のみならず、地域の保育所や幼稚園、小学校や中学校との連携を担う中核として機能することが求められている。その一貫として、地域の保育士への研修会のみならず、幼稚園教諭のための研修会や、地域で5歳児健診を担っている保健師のための研修会も実施しており、これらの活動は今後も療育センターの役割として重要であると認識している。より地域に根差した、地域のニーズに寄り添った療育センターである為に、研修の在り方については、今後の引き続き検討していきたい。

要 約

A市療育センターにおいて、平成28年度より地域の療育を担う中核としてのセンターの役割を果たすことを目的に、地域の保育士を対象とした保育士のための勉強会を立ち上げた。実際の保育現場で直面する、「気になる」

子どもを含めた、発達障害の特性を持つ子どもに関する困り感を事前アンケートにて明らかにし、その対応を中心に、保育士のニーズに沿った研修を実施した。その結果、子どもの問題行動の対応において、行動をアセスメントする視点が得られていないことが明らかとなった。そこで、心理学的見地から機能的アセスメントを行い、応用行動分析を活用し、より効果的な支援について学ぶ研修を実施した。研修後の保育士からは、具体的な対応方法を考える視点が得たこと、事前の環境調整や保育士の対応を変える視点が必要である事を習得する機会となったことが確認できた。このような心理学的援助を基にした研修が、保育士の学ぶ意欲を高めるきっかけとなったことも確認できた。

引 用 文 献

- 1) 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉嘉子・飯島典子. 2003. 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する研究. 発達障害研究, 25, 50-61.
- 2) 池田友美・郷間英世・川崎友絵・山崎千裕・武藤葉子・尾川瑞季・永井利三郎・牛尾禮子. 2007. 保育所における気になる子どもの特徴と保育場の問題点に関する調査研究. 小児保険研究, 66, 815-820.
- 3) 和田美香. 2021. 衝動・多動傾向にある子どもに対する保育者の困り感と対応の現状—質問紙調査の結果より—. 東京家政大学保育学研究, 第59巻第2号, 75-85.
- 4) 神長美津子. 2005. 支援のための取り組み (1) 幼稚園・保育所における取り組み. 武藤隆・神長美津子・河村久・柘植雅義著. 「気になる子」の保育と就学支援. 東洋館出版. 14-17.
- 5) 今村美幸・室津史子・疋田結香・森千智・藤原理恵子. 2017. 発達の気になる子どもの保護者へのかかわりの現状と課題—保育者へのインタビューから—. 健康科学と人形成, vol. 3, No. 1, 57-65.
- 6) 大対加奈子. 2016. 通常学級で支援を必要とする問題行動の機能的アセスメント—小学校と幼稚園の比較—. 近畿大学心理臨床・教育相談センター紀要, 創刊号, 1-12.

参 考 文 献

- 1) 文部科学省. 特別支援教育について. 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について. 2022. https://www.mext.go.jp/content/20230524-mext-tokubetu01000026255_01.pdf.
- 2) Skinner, B.F. (1953). Science and human Behavior. New York: Macmillan. 河合伊六・長谷川芳典・高山巖・藤田継道・園田順一・平川忠敏・杉若弘子・藤本光孝・望月昭・大河内浩人・関口由香 (訳) (2003). 科学と人間行動. 大阪: 仁瓶社.
- 3) 厚生労働省 保育課関係 (8) 障害児保育の推進について. <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-koyoukintoujidoukaateikyoku-Soumuka/0000199267.pdf#search=>.
- 4) 小川裕代・橋本典子. 2023. 発達障害や発達の遅れのある幼児を担当する特別支援担当保育士の意識と研修ニーズ

-
- 保育士研修の事前・事後アンケートに着目して—. 高知
大学学校教育研究, 第 5 号, 227–236.
- 5) 朝岡寛史・明石真奈・是永かな子. 2021. 保育士を対象と
した発達が気になる幼児の支援に関する研修の効果. 高知
大学学校教育研究, 第 3 号, 153–160.

Summary

Since 2016, the A-city Rehabilitation Center has started a study session for local childcare workers with the aim of serving as the center's core for local remedial care. We conducted a preliminary questionnaire to clarify the concerns faced by children with developmental disorders, including those we are concerned about, in actual childcare settings, and conducted training tailored to the needs of childcare workers, focusing on how to deal with them. did.

As a result, it became clear that there was no perspective on assessing behavior when dealing with children's problem behavior. Therefore, we conducted training to learn about more effective support by conducting functional assessments from a psychological perspective and using applied behavior analysis. The childcare workers who participated in the training confirmed that they were able to gain a perspective on how to respond in a concrete manner, and that it was an opportunity to learn about the need to adjust the environment in advance and change the way childcare workers respond. did it. It was also confirmed that training based on such psychological support served as an opportunity to increase childcare workers' desire to learn.